

令和四年度

# 中学校入学試験問題 国語

第二回（二月二日）

試験開始の合図があるまで問題用紙は開かず、左記の注意事項をよく読んでおきなさい。

- 一、問題は29ページまであります。足りないページや、印刷のよく見えないページがあったときは、手を上げて申し出てください。
- 二、解答用紙は別になっています。答えはすべてそこに記入してください。
- 三、解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。
- 四、問題用紙には、受験番号・氏名を書く必要はありません。

次の文章を読んで、後の1～12の問いに答えなさい（問題の都合上、本文を変えているところがあります）。

「あれ、なんて野菜？ 白っぽい」

丸山まるやまのほうから話しかけてくるなんて、初めてではないだろうか。渡り廊下わたろうかで、友梨ゆうりは立ち止まる。すぐ外にある水飲み場にいた彼かれは、確かにこちらを見ているから、友梨に声をかけたのは間違いなさそうだ。

「吉住よしずみの弁当に入ってただろ？」

そういえば、昼食の時間にそばを通りかかった丸山に、お弁当をじっと見られたような気がしていたが、気のせいではなかったらしい。

「うん……、白いパプリカ。めずらしいでしょ？」

クラスの数人で話の A いても、彼は頷うなずいていて、ただで言葉を発することが少ないのに、よほどパプリカが気になったのだろうか。白いパプリカは、お父さんが育てたのだ。まだ収穫量しゅうかくりょうは少ないし、家で食べているだけで、色も真っ白というよりほんのり黄色味きいろみがかっている。

「白いのってあるんだ。味は？」

「お弁当のはピクルスだから……」

ピクルスの味、なんて言えば、自分でつくったのではないことがバレてしまいそうで、友梨は口をつぐんだ。続きを待っているのか、丸山も黙だまっているから、微妙びみょうな空気が流れる。

「ふつうのパプリカと同じだよ」

赤いのと黄色いのも味は違ちがうんだと、お父さんが言っていたのを思い出すが、友梨にはよくわからない。料理が得意なはずなのに、パプリカの微妙な違いを同じだと言うなんておかしい、と丸山が思ったかどうかはわからないが、まだ納得なつとくできないように、友梨をじっと見ている。それ以上突つっ込こまれたくないから話をそらそうとして、彼が流しで洗っていたらしいお弁当箱に、友梨は目をとめた。

「お弁当箱、いつも洗って帰るの？」

彼は頷く。

「丸山のお弁当っていつも凝こってるよね。お母さん、料理上手なんだろうなって、みんな言ってるよ」

無難な話題だったつもりだけれど、彼は気分を害したように見えた。

「ピクルス、どうやってつくってるの？」

また話もが戻もる。ぶっきらぼうな口調はいつもそんなふうだけれど、今はもっと攻撃こうげき的に聞こえた。実際、彼にとってはそういう意図だったのかもしれない。

「えっ、どうって……」

「つくりかた、教えてよ。自分でつくってるんだろ？」

「興味、あるの？ 料理に？」

「あるわけないだろ」

B  
だ。

「……そうだよね。料理なんてできなくても、おいしいもの食べられるもんね」

彼はにらむように友梨を見ている。ピクルスのつくりかたなんてわからないから、友梨は困惑こんわくしたまま黙っているしかない。

友梨から視線をそらし、洗い終えたお弁当箱を勢いよく振ふって水気を切る。小さなしぶきが、キラキラと舞まう。友梨は、お父さんが畑はたに撒まく水に虹にじが光るのを思い浮うかべる。お父さんはいろんな野菜をピクルスにして、瓶びんを並べている。家の台所では、色とりどりの瓶びんが、窓辺でキラキラ輝かがやいている。

「本当に料理できんの？」

そうか、丸山は、本当のところ友梨が自分でお弁当をつくっていないのではないかと勘かんぐっているのだ。でも、だからって、突つっかかってくるのはどうしてだろう。

お弁当袋べんとうぶくろに洗ったものを放り込こんで、丸山はくると背を向ける。友梨は黙ったまま、彼の背中とぶら下げたお弁当袋が遠ざかるのを眺ながめていた。

使い込こんだお弁当袋だ。紐ひもを通したところがほつれている。何度も洗って使い込んだ生地きじも、ずいぶん色あせていた。

友梨はふと気がついた。芽依めいの好きな男子は、丸山だ。同じフットサル部だし、芽依が言っていたように、母親が料理上手で完璧かんぺきだというのも合う。何よりあのお弁当袋だ。新しいものをつくってあげたいと思ったに違ちがいない。

それにしても、友梨は不愉快ふゆかいな気分だった。どうして丸山は、友梨のお弁当のうそに気づいたのだろう。思い浮うかぶのは、芽依が話した可能性だ。芽依とはまた、以前のようにつきあえそうな気がしていたのに、やっぱり気を許してはいけないのだろうか。いや、そもそも友梨がお父さんのことを秘密ひそみにしているからややこしいのであって、父親が家いへにいることくらいどうってことはないし、割り切きってしまえば、何の問題もない。実際に芽依にとっては、友梨の家の事情しじょうなんて、ちょっとした会話の足しでしかない。隠かくすほどのことでもないと思おもっているのだろうし、悪気あくきはないから話してしまうのだ。

しかし、芽依から聞いたとしても、丸山にとっては聞き流すようなことではなかったのか。どういうわけか、友梨のうそが気に障さわっている。

いったい何なの？　こんがらがった毛糸みたいに、ほどけそうにない。

しゃしゃもしややゝ

もしゃしゃの中のしゃしゃもしややゝ

帰りの電車を待ちながら、友梨は駅のベンチで編み物をする。部活ではウサギを編んでいるが、学校を出たらオタマジヤクシだ。

編み物が好きなのは、思おもい描えがいたものが少しずつできあがっていくからだ。手を動かせば、だんだんと形になる。選んだ色と、編み方の組み合わせ、編み目を飛ばしたり増やしたりすれば形も変わる。友梨の手の中で、オタマジヤクシができていく。頭の中にあつたものが、目の前に現れる。でもウサギは、友梨が考えたものじゃない。

作業は同じだけれど、たぶん友梨は、編むことそのものよりも、想像したものをつくり出すことが好きで、その手段がたまたま手芸だっただけなのだ。

③ だったら友梨は本当に手芸てぎが好きなのだろうか。手芸部は女子部員ばかりだ。女の子らしい趣味しゅみなのに、④ 足の生えかけたオタマジヤクシは女の子らしくないからバザーには出せないなんてことに引つかかって、せっかく好きなものを編んでいても楽しめない。

つい乱暴に毛糸を引っ張ってしまふからか、固い結び目ができてしまふ。

もしやしやなければ

しやしやもしやもなし

「いったい、もしやしやって何だろう。」

「ふうん、オタマジヤクシか」

顔を上げると、和島瑛人わじまえいとがこちらを見下ろしている。はっとして、友梨は編みぐるみを急いでカバンに突っ込んだ。<sup>⑤</sup>

「なんで隠すの？」

「ていうか、どうして瑛人くんがここにいるの？」

「叔母さんおばのお見舞いみまい。病院がこの近くなんだ」

それで彼も帰るところらしい。

「もしやもしやって何？ 今つぶやいてただろ？」

「絡まった糸からをほどくおまじない」

「じゃあ、ちゃんとほどかないと、ますます絡まるよ」

彼の言うとおりだ。どうせオタマジヤクシは見られてしまったし、友梨はあきらめて編みかけを取り出す。

「おまじないで、本当にほどけるの？ やってみてよ」

瑛人は隣となりに座すわって、C津々しんしんで友梨の手元のぞを覗のぞき込んだ。ひいおばあちゃんに教わったとおり、唱なえながらほぐしていく。

やがてきれいにほどけると、瑛人はまじめな顔おそろで驚おどろいている。

「不思議でしょう？ いつも時間がかかってうんざりするんだけど、呪文じゅもんを唱えたらずっと早くほどけるの」

「へえ、ほどこうとあちこち引つ張るより、無心むしんになってまんべんなく力を加えたほうが、糸がゆるむってことなのかな」

「じゃあ、呪文は何でもいいのかな？」

「いや、その言葉にも力があるんじゃない？ 糸をほどく呪文だっという意識で、昔から使われてたなら、きっと言霊ことだまが宿ってるんだ」

「言霊って、言ったことが本当になるってやつね」

「うん。そのゆるーいリズムや音のイメージで、リラックスできるのも効果的なんだろうな」

「なるほど、そうなのかも……。ひいおばあちゃんは、小鬼こおたを追い払はらうって言ってたけど」

小鬼か、と瑛人は楽しそうに笑う。⑦ こういう話題わだいでも小馬鹿こばかにしないから、友梨は瑛人と話すのが好きだ。

「小鬼が毛糸に、一生懸命いっしょうけんめい結び目をつくっているとすると、数学のできる奴やつらだね」

「数学？ どうして？」

「結び目理論むすびめりろんっていうのがあって、紐状ひもじょうのものは、自由に動いているうちに必ず絡かまってしまっただって。で、そのパターンも決まってる、らしい」

「じゃあその、決まったパターン以外の絡まり方はしないってこと？」

「うん、だからそのもしやしやの神さま？ もパターンを熟知してて、小鬼がどの結び目をつくっても、たちどころにほどいてしまっただよ、きつと」

小鬼と神さまが数式を駆使くしして対戦しているとところを想像し、友梨は笑ってしまった。

「オタマジヤクシ、後ろ足が生えかけてるんだね」

「これね……、ま、瑛人くんになら見せてもいいか」

カエルになるなんて、とても想像できないようなオタマジヤクシ、そこに足が生え、尻尾しっぽがなくなるなんてどういふことだろう。幼かった友梨には神業かみわざとしか思えなかったから、編みぐるみをつくるようになったときに思い浮かんだのだ。

「秘密にしているの？」

「オタマジヤクシを編みたいって言ったら、みんな気持ち悪いって言うのよね。もつと女の子らしい動物の編みぐるみにすればって。でも、女の子らしい動物って、なんだろ。哺乳類ほにゅうるいならドブネズミでもいいの？ よくわからないな」

「そうか、オタマジヤクシ。友梨ちゃんらしい」

瑛人が笑う。彼には、ゆつたりとした独特のテンポがある。どこか周囲とは違う空間にいるかのようなだけけれど、地元で会うときも、繁華街はんかがいの駅でも変わらない。友梨は巻き込まれて、オタマジヤクシでもやもやしていた気持ちも消え失うせる。

「小さいころ、田んぼのオタマジヤクシを真剣しんけんに見てたよね？ 友梨ちゃんは、虫も花もトカゲでも、C 津々だったからなあ」

たぶん、マンション暮らしでは見えないものが、ひいおばあちゃんの家やその周囲にはたくさんあって、じっと見ていても飽あきなかった。思えば瑛人も、そういうものをずっと見ていられる子供だったから、よくいっしょに過ごしていたのではないだろうか。

長い時間ふたりで、黙って田んぼの縁ふちに座っていたから、お互いお互いが現実の友達なのか空想なのか、曖昧あいまいにもなったのかもしれない。「これも、後ろ足とお腹なかの渦巻うずまきにすごいこだわりを感じるよ。この感じ、形とか」

女の子らしく、お姉さんらしく、高校生らしく、何かとそんなふうに言われてきて、疑問ばかりが頭に浮かぶのに、友梨らしいという瑛人の言葉には、不思議とキラキラした思いで胸を満たされる。<sup>⑧</sup> 編みかけのオタマジヤクシが、友梨の手の中で、ほわっとあたたか



くなったように感じられる。

もしゃしゃのおまじないがほどののは、糸だけじゃないのだろうか。

「らしいって、何だろうね。わたしなんて手芸部で、お弁当を自分でつくってるからって、女の子らしいって言われることあるけど、編みぐるみは不気味だし、お弁当は自分でつくってるなんてうそだし」

「ふうん、そんなうそついてるんだ」

どういうわけか、瑛人には話せてしまう。お父さんが家事をしていることを、隠す必要がないからか。

「だって、野菜にこだわってヘルシーだし、やたらおしゃれな女の子向けのお弁当なのに、お父さんがつくってるなんて言いにくくて。それに、お父さんが無職だったこと、中学のときにはいやなこと言う子もいたから」

友梨のお父さんは、みんなのお父さんとは違う。毎日家にいるし、ジャージ姿で昼間からスーパーで買い物をして、家族のご飯をつくる。ゴミ出しも、掃除もアイロン掛けもする。

でも、それは恥ずかしいことだろうか。

「この前ね、クラスの男子にお弁当のこと突っ込まれたの。ピクルス、どうやってつくるのかって。わたし、わからなくて答えられなかったけど、あの子はうちのお父さんが無職だって知ってるのかも」

「知ってて、わざとつくりかたを訊いてきたってこと？」

そんな気がする。

「答えられなかったら、本当に料理できるのかって言われた。彼のお母さんは料理上手で、毎日お弁当が凝ってるの。とにかく完璧な人らしいから、できもしないのにできるふりしてる女はむかつくのかなあ」

「完璧なお母さんか。そんな人いるのかな」

瑛人が首をかしげると、くせのある前髪が **D** ゆれる。また友梨は、不思議なものを見ている気分になる。

「うちのお母さんは、酒造りに詳しいけど、全く飲めない」

「えっ、ホント?」

飲めないのは意外だけれど、 **E** 仕事ができるなら問題ない。ただ、それを完璧じゃないと思う人もいるのだろう。でも、そんなのは偏見で、和島酒造の奥さんでもある瑛人の母親は、ご近所でも評判の若女将だ。

完璧の基準なんて、人それぞれなのだとしたら、どうしてみんなは、丸山の母親を完璧だと思っただろう。

待っていた電車が、ようやくホームに入ってくる。友梨と瑛人は立ち上がる。 **F** 膝から落としてしまった毛糸玉を瑛人が拾う。

友梨のカバンからつながった、藍色の毛糸玉を持ったまま、瑛人は歩き出す。オタマジャクシの渦巻きから、 **G** 伸びた糸が彼につながっているのが、なぜか妙にくすぐったかった。

(谷瑞恵『神さまのいうとおり』による)

問1 **A** に当てはまる言葉として適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 淵をのぞいて

ロ 輪に加わって

ハ 腰を折って

ニ 種になって

ホ 山に入って

問2

B

に当てはまる言葉として適當なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 意気消沈いきしょうちん

ロ 自由奔放じゆうほんぼう

ハ 支離滅裂しりめつれつ

ニ 本末転倒ほんまつてんどう

ホ 優柔不断ゆうじゆうふだん

問3

——線①「突っかかってくる」とあるが、このような「丸山」の態度を表現した三字の言葉を、文章中からぬき出しなさい。

問4

——線②「友梨のお弁当のうそ」とは具体的にどのようなことか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問5

——線③「友梨は本当に手芸が好きなのだろうか」とあるが、「友梨」がこのように考える理由として最も適當なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 頭の中にあるものを目に見える形にすることの方が、編み物そのものよりも好きだから。

ロ 手芸は女の子らしい趣味なのに、なぜか女の子らしくないものをつくりたいと思うから。

ハ 好きなものをつくるのは楽しいが、人が強要したものをつくるのは好きではないから。

ニ 好きでないものをつくる時には、糸糸を強く引っ張ってますます絡ませてしまうから。

問6 — 線④「足の生えかけたオタマジヤクシ」とあるが、「友梨」が「オタマジヤクシ」に心ひかれて理由を述べた一続きの二文を文章中から探し、最初の三字をぬき出しなさい。

問7 — 線⑤「はつとして、友梨は編みぐるみを急いでカバンに突っ込んだ」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適切なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 周囲からの評判が悪く、こっそり編んでいたオタマジヤクシを見られたくなかったから。
- ロ 手芸部からバザーに出品するものを、その日まで瑛人には秘密にしておきたかったから。
- ハ 本当はウサギを完成させなければいけないのに、オタマジヤクシを優先させているから。
- ニ 結び目をほぐすのに、まじめにおまじないをつぶやいていたことがはずかしかったから。

問8 二か所ある C に共通して当てはまる漢字二字を答えなさい。

問9 — 線⑥「無心になって」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 精神統一して
- ロ 適当におこなって
- ハ 何も考えないで
- ニ 関心を持たないで

問10 —線⑦「こういう話題」とは、どのような話題か。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 昔から言い伝えられている小鬼の存在を暗示するような、げんそうてき幻想的な話題。

ロ 呪文を唱えたと小鬼を追い払うことができるという、めいしん迷信じみた話題。

ハ 大人が子供へお説教するための、今ではもはや時代遅れじだいおくとなった話題。

ニ 言霊の力のおかげでリラックスできるという、科学的に根拠こんきょのない話題。

問11 —線⑧「編みかけのオタマジヤクシが、友梨の手の中で、ほわっとあたたかくなったように感じられる」とあるが、この時の「友梨」の心情の説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 無理をして周囲に合わせていたが、周りの意見など気にしない瑛人に刺激しげきされ、自分への自信を取り戻もどしている。

ロ 評判の悪いオタマジヤクシを、友梨の作品らしいと言った瑛人に勇氣づけられて、編み物への情熱が再燃している。

ハ 女の子らしいという一般的な見方いっぱんてきなど気にせず、友梨の幼い頃こころを忘れずにいてくれる、瑛人への好意を確信している。

ニ 周囲の声を気にしていたが、ありのままの友梨を認めてくれた瑛人の言葉によって、少し前向きな気持ちになっている。

問12 

D
---

G
---

 に当てはまる言葉として適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい（同じ記号は二度使えない）。

イ うっかり      ロ ちゃんと      ハ てつきり      ニ ふわりと      ホ まっすぐ

次の文章を読んで、後の1～14の問いに答えなさい（問題の都合上、本文を変えているところがあります）。

ほとんどのサルは尻尾で物をつかむことができない

子どもの頃、両手がふさがっているのに、もう一つ持たなければならぬ荷物がある時に、尻尾があつたらいいなと思ったことがある。それは漠然と、サルには物をつかめる尻尾があつて便利だなあ、というイメージを持っていたからだ。

どうしてそんなふうに思っていたのか。何かの絵本で、サルが尻尾で枝をつかんで、楽しそうにぶら下がっているのを見たような記憶がある。しかし、最近になって、どの絵本だったろうかといくら調べても、それらしいものが見当たらないのだ。

僕の子どもの時代にサルの絵本といえばH・A・レイの「ひとまねこざる」だったので確認してみたが、主人公のジョージは、アフリカから連れてこられた尻尾のないサルという設定だった。残念ながら尻尾でぶら下がっている描写はなかった。

単なる思い込みなのか、今となってはよくわからない。そして、大人になってわかったのは、実はほとんどのサルは、尻尾で物をつかむことができない、という事実だった。

この話をする時、結構生きものに詳しい人でも、えっ、サルの尻尾で巻きつくのが普通でしょ？ という反応をする。やはり、僕だけではなく多くの人がそう思い込んでいるのだ。

① どうしてみんながそういう思い違いをしているのか。僕は今でも絵本の影響だと思っているのだが、それが見つからない。知っている人がいたら是非教えていただきたい。

② もし動物園に行く機会があれば、どんな種類でもいいので、サルを見て欲しい。私たちに一番身近なニホンザルは、尻尾がほとんどないのであまり参考にならないが、長い尻尾を持っているサルを見つけても、ほとんどがだらんとお尻からぶら下がっているだけで、

物に巻きつけることはできないとわかるはずだ。

説明板でその生息地を見てもらえば、アフリカからアジアに棲むサルであることがわかるだろう。実は、アフリカやアジアに分布しているサルをいくら探しても、巻きつく尻尾を持っているものはいない。

A

それは、樹上で生活す

る時に、バランスを取るために使っていると考えられている。

そして、もし動物園で運良く巻きつく尻尾を持つサルを見つけたら、彼らの生息地は、中南米であるはずだ。地球上で「巻きつく尻尾」を持つているサルは、中南米に棲んでいるクモザルとホエザルの仲間だけなのだ。

実は、アジアとアフリカで進化したサルと南米で進化したサルは、分類学的には、かなり系統が違う。前者を旧世界ザル（鼻の穴の間が狭いので狭鼻類という）というのに対し、後者は新世界ザル（鼻の穴の間が広いので広鼻類という）と呼ばれている。その名の通り、サルにとって、南米は新しい世界なのだ。

サルは、6600万年前に恐竜が絶滅し、哺乳類の時代が始まった後のユーラシアに起源があり、そこからアフリカに渡って進化していったと考えられている。現在も生きている原始的なサルを原猿というが、そのほとんどはアフリカ周辺に棲んでいる。マダガスカルに生息する有名なアイアイをはじめとするキツネザルのグループがその代表だ。

原猿はもともと夜行性だったが、恐竜が絶滅したことで、昼の世界に進出するサルが現れた。我々人間につながっていく現在のサルの主流派である真猿の誕生だ。

およそ3500万年前、その中にアフリカから大西洋を渡り、南米にたどり着いたものがいた。まだ体が小さかった真猿の祖先は、木の洞などで群れが一緒に寝ていたと考えられている。アフリカで大きな嵐が起こった時、寝ぐらにしていた大木が倒れ、川から海に流し出され、海流に乗って南米大陸までたどり着いたと推測されているのだ。

現在の世界地図を見ると、アフリカから南米まで、最も近い場所で3000キロも離れている。これは、知床半島の先から与那国島まで、つまり日本列島の端から端までとほぼ同じ距離になる。とても流木に乗って渡るなんてできそうにもない。

しかし、よく知られているように、アフリカと南米は、およそ1億年前に大陸移動によって分裂を始め離れ離れになった大地。

3500万年前は、今よりも **B** のだ。

しかも、赤道付近の海流は、アフリカから南米に向かって流れているので、流木は早ければ1ヶ月、長くても2、3ヶ月で大西洋を渡り、南米にたどり着いたと推測されている。

3500万年前、真猿には幾つかの原始的な系統があったと考えられている。その中から南米に渡ったのは偶然、**C** の祖先だった。その後、アフリカでは、**D** の祖先は **E** との競争に敗れ絶滅したが、元々サルが棲んでいなかった南米で独自の進化を遂げてきたのだ。

現在、150種ほどいる新世界サルは、遺伝子の研究により、たった1種類の祖先から分化したことがわかっていて、つまり、大西洋を渡ってきたのは1回だけ。数千万年の間に起きた、1度の奇跡が、南米に新しいサルの世界を作り上げたのだ。

### 手のひらに収まるほどの小ささ

渡ってきた祖先はおそらく、現在のマーモセットやタマリンのような小型のサルに似ていて、人間の手のひらに収まるほどの小さな体だっただろう。川から海に流しだされた時に乗っていた大木か流木が集まった筏の上で、昆虫や木の実、樹液などを食べて、漂流生活を生き延びたと考えられている。

彼らはたどり着いた南米大陸でも、まずは大きな森の周辺にある、細い木が混み合ったブッシュのような場所で生活を始めたのだら



う。ブッシュの中は、食べ物になる昆虫が多く、タカなどの捕食者<sup>④</sup>からも身を隠し<sup>かく</sup>やすい。そんな木々の間を、身軽な体で枝から枝に跳んで、移動していたと考えられている。

新世界ザルの祖先は、当初は広大な森の奥<sup>おく</sup>には進出できなかった。30メートルを超える巨木<sup>きよぼく</sup>がそびえ立つ原生林の中は、木と木の間が広く、小さな体では移動できないからだ。

しかし、生きものは、生存するのに適した場所（生態的地位、ニッチ）が空いていると、そこに進出していく傾向<sup>けいこう</sup>がある。新世界ザルの祖先がたどり着いた当時の南米大陸の森で、樹上生活をしていた哺乳類<sup>ほにゅうりゆう</sup>といえば、オポッサムとナマケモノやアリの仲間<sup>仲間</sup>くらい。素早く<sup>すばやく</sup>動ける哺乳類はいなかったと考えられている。

競争相手がいない原生林をサルたちが見逃<sup>みのが</sup>すはずはない。巨木の森に生息<sup>せいしつ</sup>範囲<sup>はんい</sup>を広げていくものが現れたのだ。

## 地面を歩かない2つの理由

樹上生活をする生きものにとって、巨木の生<sup>お</sup>い茂<sup>しげ</sup>る原生林で一番問題になるのは、木と木の間が離れている森の中をどのように移動するかということ。地面を歩けばいいじゃないか、と思うのは、自然の厳しさを知らない、都会で生きている人間の考え方だ。

現に新世界ザルの中で、積極的に地面を歩く進化を遂げたものはいない。その理由は、大きく分けて2つある。

1つ目は、地面には得体の知れない恐ろしい捕食者<sup>おそ</sup>がたくさんいることだ。木の上の方がずっと安全。

2つ目は、背の高い森を移動するために、木の上から一度地面に降りて、また木に登るのは、余分なエネルギーを消費することになるからだ。ダイエットのために階段の上り下りぐらいしたほうがいいと考えるのは、あなたが有り余る食料を食べているから。野生動物は基本的に、ギリギリのエネルギー収支で生活している。移動に使うエネルギーは最小限にする方向に進化するのが定石なのだ。

植物群集の変化を「遷移」と言うのは、中学校の理科で習ったと思う。湿潤な熱帯地域で何万年、何十万年も自然のまま遷移した森は、数十メートルある巨木がそびえる「極相林」と呼ばれる状態になる。

巨木は、てっぺんに茂る葉で太陽の光を独占するため、森の中は薄暗く、他の木は育ち難くなるため、地面に近い場所では木と木の間は離れている。そこに棲む生きものは、ある程度の間隔が空いている場所を移動するために、体が大きい方が有利になるのだ。

巨木の森で隣の木との間隔が一番狭いのは、葉っぱが茂るてっぺん付近。そこなら木から木へ枝をつかんで移動できるかもしれない。

F、地面から何メートルもの高さがあるため、万が一にもつかんだ枝が折れて地面に落ちたら死んでしまう。しかも、右手で今いる木の枝をつかみ、左手で移動する先の木の枝をつかむという方法では、枝と枝が接している木にしか移ることができない。もう少し、手を伸ばせば届くんだけど……、というところを無理して手を伸ばすと、元いた木の方の枝が折れて落下、ということもある。

G、あなたがどうしてもそんな場所を移動しなければならぬとしたら、どうするだろうか？ 間違いなく1本のロープで体を固定する命綱を使うだろう。しかし生きものたちは、そんな道具を使うことはできない。そこで、体の使っていない部分が、その役割を担うように進化した。それが、巻きつく尻尾なのだ。

枝から枝に移る時、常に尻尾を枝に巻きつけておけば、安心して手を伸ばせるし、万が一つかんだ枝が折れても落下を防ぐことができる。

H、木に実っている食べ物を採る時も、もうちょっとで手が届くという時にも、尻尾を支えに使える。こうして、安全装置としての巻きつく尻尾が進化したと考えられている。

(中略)

### 南米で尻尾が進化した秘密

実は、サルに限らず、自分の体を支えられるほど強い力で巻きつく尻尾を持っている哺乳類はかなりの少数派だ。森の中に棲む生きものでは、有袋類のオポッサム、樹上性のアライグマ、アライグマの仲間のキンカジュー、カピバラの仲間のオマキヤマアラシ、ジャコウネコの仲間のビントロング、そして全身鱗に覆われたセンザンコウなど、6つのグループに限られている。

そのうちの4つが、南米大陸の森で進化を遂げたのだ。つまり、巻きつく尻尾が進化した秘密は、生きものとしての特異性以上に、南米の森の環境が関係していると推測されている。なぜ、南米には、他の地域と比べ巻きつく尻尾を持つ哺乳類が多いのか？ その説明でよく用いられるのが、森の構造の違いだ。

世界最大の熱帯雨林、アマゾンには、空から見るとまるで絨毯のように一面の緑で覆われている。文字通り、隙間なく高さもほぼ均一の森が、地平線まで大地を埋めつくしている。

木の高さがほぼ均一なので、隣り合っている木と木の間に

Y

ので、

Z

ことが多くなる。そのため、安全装置としての巻きつく尻尾が進化したと考えられているのだ。

X

X

ということとは、生きものにとっては

(中略)

尾巻き生物のスターたちが棲む南米(新世界)に比べると、アジアやアフリカ(旧世界)では、巻きつく尻尾を持った森に棲む哺乳

類は、先述の通り、ビントロング1種と、センザンコウの仲間8種しか知られていない。それはいったいなぜなのか？

その理由の一つとして、東南アジアの熱帯雨林には、高さ70メートルにもなる、突出して大きな木が聳え立っており、林冠（森のてっぺん）がでこぼこしていて、木と木の間のギャップが大きいことが挙げられる。こうした森では、隣の枝を手でつかんで移動することは難しい。そのため、生きものたちは、木と木の間を移る手段として「滑空」という方法を進化させてきたのだ。爬虫類では、肋骨を広げて翼のような構造を作り出すトビトカゲや、同じように肋骨を広げて体を平らにし、S字型になることで抵抗を増やし滑空するトビヘビがいる。

両生類のトビガエルは、水かきのある手と足を大きく広げ、抵抗にして飛ぶ。哺乳類では、手足の間の皮膚を使って滑空するムササビやモモンガの仲間が有名だ。

さすがにサルの仲間では滑空を進化させたものはいないが、霊長目と近縁で皮翼目という独特の分類をされるヒヨケザルの仲間がいる。ヒヨケザルは、ムササビと同じように首、前脚、後脚、尻尾の先端の間に皮膜が伸びた「飛膜」を持っている。木の幹から勢いよく飛び出すと、素早く手足を伸ばし飛膜を広げること、まるでグライダーのように100メートル以上の距離を滑空するのだ。この滑空は、東南アジアで主に進化した移動方法で、南米ではまったく見られない。⑧それは、南米には、木からぶら下がるつる植物が多く、それが滑空する時の障害物になるからだといわれている。また、木と木の上に吊り橋のようなつるや蔦があるので、それを伝って移動すれば良いのでわざわざ飛ぶことはない、という理由もある。

つる植物の存在は、木に登る生きものにとっては有利に働くので、それをもっと生かすために巻きつく尻尾が進化したというわけだ。

（岡部聡『誰かに話したくなる摩訶不思議な生きものたち』による）

問1 — 線①「みんながそういう思い違いをしている」とあるが、「みんな」はどのような思い違いをしているのか。それを説明し  
た次の文の【 I 】【 II 】に当てはまる表現を、( )内に示した指定の字数で考えて答えなさい。

・本当は【 I (二十五字以内) 】の【 I (十五字以内) 】という思い違いをしている。

問2 — 線②「是非教えていただきたい」とあるが、何を教えてほしいのか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ サルが尻尾で枝をつかんでいる描写の絵本
- ロ サルが尻尾で物をつかむことができない事実
- ハ サルが尻尾で枝にぶら下がることができる理由
- ニ サルが尻尾で物を持つことができることとされた根拠

問3

A

に当てはまる文として適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ では、どうしてサルは尻尾を枝に巻きつけるのか？

ロ では、なんのためにサルは尻尾を持っているのか？

ハ では、サルの生息地とは何か関係があるのだろうか？

ニ では、何を使ってサルはバランスを取るのだろうか？

問4

B

に当てはまる言葉として適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 大きかった

ロ 小さかった

ハ 遠かった

ニ 近かった

問5

C

く

E

には、「イ 狭鼻類」か「ロ 広鼻類」のどちらかが当てはまる。それぞれ選んで記号で答えなさい。

問6 — 線③「南米に新しいサルの世界を作り上げた」とあるが、「新世界ザル」が「新しいサルの世界を作り上げた」過程はどのようなものであったか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 数千万年前、哺乳類の時代が始まったユーラシア大陸から大西洋の海流に乗ってたどり着いた。
- ロ 6600万年前に恐竜が絶滅し、哺乳類の時代が始まったことよって昼の世界に進出した。
- ハ およそ一億年前のアフリカと南米は地続きであったため、祖先が地上を移動し進化をした。
- ニ およそ3500万年前に、寝ぐらにしていた木が嵐で倒れ、海に流され南米に漂着した。

問7 — 線④「捕食者」とほぼ同じ意味の熟語を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 強敵
- ロ 宿敵
- ハ 天敵
- ニ 無敵

問8 — 線⑤「そこ」とあるが、「そこ」とはこの場合どこをさすか。その場所について具体的に説明した表現を、これより後の文章中から十一字で探し、最初の三字をぬき出しなさい。

問9 — 線⑥「体が大きい方が有利になるのだ」とあるが、なぜそう言えるのか。その理由として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 体が大きいことで薄暗い中でもお互いの個体を認識しやすく、集団行動を取りやすいから。
- ロ 体が大きいことで巨木の森の中でもつぺん付近まで登ることができ、移動しやすいから。
- ハ 体が大きいことで行動範囲が広がり、地上でも樹上でも食べ物を採れる範囲が広がるから。
- ニ 体が大きいほうが力も強いことが多くて、地上でも捕食者に狙われる可能性が少ないから。
- ホ 体が大きいほうが手足も長く、木と木の間隔が広い場所でも隣の木に手が届きやすいから。

問10 

F
---

H
---

 に当てはまる言葉として適当なものを、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい（同じ記号は二度使えない）。

- イ もし
- ロ さらに
- ハ しかし
- ニ つまり

問11 — 線⑦「安全装置」とほぼ同じ意味で使われている言葉を、文章中から漢字二字でぬき出しなさい。



問12

X

Z

に当てはまる表現を、次の中から一つずつ選んで記号で答えなさい（二か所ある

X

には同じ言葉が

入る。同じ記号は二度使えない。

イ 隙間がない

ロ 光が入らない

ハ つる植物が障害になる

ニ 木を伝って移動をする

ホ 手を伸ばせば隣の枝に届く

ヘ 木と木の間を飛んで移動する

問13

——線⑧「それ」の指す内容を、三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問14

この文章の内容に合っているものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 狭鼻類は捕食者を避けて、食料を効率的に手に入れ、エネルギーの消費を最小限に抑えるために樹上生活を選択した。

ロ サルが尻尾で木からぶら下がるといふのは、人間が想像して描いた姿であり、本来の野生の姿とは異なるものである。

ハ アジアと南米の熱帯雨林に棲んでいる生きものたちは、それぞれの環境に合わせて、まったく違った方向性で進化を遂げた。

ニ 旧世界ザルは生存するのに適した場所を求めて新世界に移動し、そこで競争相手が少ない環境を生活の場所として選んだ。

三二

次の新聞記事「美の季想きそう 桜の上野公園（高階秀爾たかしなしゅうじ）」を読んで、後の1〜6の問いに答えなさい（問題の都合上、本文を変えているところがあります）。

各地で花便りの聞かれる季節となった。

南北に長く、起伏きくに富んだ日本列島では、開花の時期は場所によって一定ではない。この季節になると、テレビでも桜前線がどこまで上①したか連日のように報じられるが、このようなことはフランスでは見られない、と友人が笑っていた。

日本人がそれほどまでに桜の開花の時期を気にするのは、それに合わせて花の宴えんを催もよおすためである。日本では昔から、春の年中行事として花見が盛んであったが、この風習は、③どうやら日本独自のものらしい。そう言えば、アメリカ、ワシントンのポトマック河畔かはんには、日本から贈おくられた3千本あまりの桜並木が並んでいるが、その下で宴うたげが開かれたという話は聞いたことがない。

満開の時期を迎むかえた東京の上野公園では、さすがに新型コロナウイルスの感染症かんせんしやうのせいで宴席えんせきは禁止されていたが、遊歩道には花を楽しむ人びとの姿が絶えない。

花に託たくして春日ののどかさを吟ぎんじた芭蕉④に

⑤花の雲鐘かねは上野か浅草か

の一句がある。この場合、上野は東叡山寛永寺とうえいざんかんえいじ、浅草は金龍山浅草寺きんりゅうざんせんそうじであろう。芭蕉には、それと対たいをなすかたちで、⑥観音のいらか

みやりつ花の雲」の吟がある。観音は言うまでもなく浅草観音あさくさかんのんのことで、浅草寺の壮麗な屋根そうらいを見やる視覚的効果と、遠くから流れてくるゆったりとした「鐘」の響ひびきが、春の日ののどかさを漂ただよわす「花の雲」によって結びつけられる。

⑦ かつて江戸時代には、この町に大名庭園をはじめとしてさまざまな花の名所があり、そのなかのあるものは、公園と姿を変えて現在まで受け継がれている。上野公園はまさしくそのような人気スポットの一つとなっている。(後略)

『朝日新聞』 2021年4月13日 夕刊

問1 — 線①「□上」の□に当てはまる方角を、漢字一字で答えなさい。

問2 — 線②「このようなこと」とはどのようなことか。その内容として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

- イ 桜が地域ごとに時期をずらして咲いていくこと。
- ロ 桜の開花状況がニュースとして報道されること。
- ハ 日本列島では各地の花便りの様子が異なること。
- ニ 春の年中行事として桜の花見を行っていること。

問3 — 線③ 「この風習」とは、どのような「風習」か。文章中の言葉を使って十五字以内で説明しなさい。

問4 — 線④ 「芭蕉」が詠んだ句を、次の中から、一つ選んで記号で答えなさい（引用の俳句は、すべて浜島書店『国語便覧』による）。

イ いくたびも雪の深さを尋ねけり

ロ 五月雨をあつめて早し最上川

ハ 菜の花や月は東に日は西に

ニ 夏草や兵どもが夢の跡

ホ 名月を取ってくれろとなく子かな

ヘ 目に青葉山ほととぎす初鯉

問5 — 線⑤ 「花の雲鐘は上野か浅草か」、— 線⑥ 「観音のいらかみやりつ花の雲」について、次の(1)～(3)の問いに答えなさい。

(1) 二つの句と同じ季節の季語を、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 女郎花

ロ 菊

ハ 山茶花

ニ 芹

ホ 水芭蕉

(2) 「花の雲」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

イ 青空に浮かぶ花びらのような雲の様子。

ロ 花見に集まった人々ののどかな様子。

ハ 桜の花が一面に咲いている様子。

ニ 桜が咲く季節の曇り空の様子。

(3) 二つの句について説明している次の文章の（A）、（B）に当てはまる言葉として最も適当なものを、後のイ〜ホの中から一つずつ選んで記号で答えなさい。

・ ⑤、⑥ともに、人々が満開の桜の中集まっていることを、芭蕉が家で想像している俳句である。⑤は「上野か浅草か」と（A）を働かせて想像し、⑥は「観音のいらか」を（B）的に想像することで、より春ののどかさを表現している句となっている。

イ 視覚      ロ 味覚      ハ 嗅覚きゆうかく      ニ 触覚しよっかく      ホ 聴覚ちようかく

問6 — 線⑦「かつて」が直接かかる言葉はどれか。最も適当なものを、次の中から一つ選んで記号で答えなさい。

・ かつて江戸時代には、この町に大名庭園を はじめとしてさまざまな花の名所があり、そのなかの あるものは、公園と姿を変えて現在まで 受け継がれている。

## 四

次の文の――線のひかれたカタカナを漢字に直しなさい。ただし③は、送り仮名も書くこと。

- ① 結婚披露宴けっこんひろうえんのシヨウタイジヨウが友人からとどいた。
- ② 母の日に赤いカーネーションをフンパツして買った。
- ③ 久しぶりに田舎いなかにあるおばあちゃんの家をタズネル。

本校の許可なく、掲載内容の一部およびすべてを複製、転載または配布、印刷するなど、第三者の利用に供することを禁止致します。